



故 余田博通教授

故余田博通教授をしのんで

社会学部長 武 田 建

1983年12月4日午前1時40分、私たちが敬愛する余田博通先生が天に召されました。その前々日病院に参上したとき、先生は関西学院大学のそして社会学部の将来について熱っぽく語って下さったことを今でもはっきりと覚えています。お別れするときに、しっかりと握って下さった先生の手のぬくもりが、今でも私の手に伝わってくるように感じられます。2月に片肺切除という大手術をお受けになったにもかかわらず、早く学校にもどらなくてはと、リハビリテーションのために阪大病院の廊下を懸命に歩いておられる姿がはっきりと目に浮びます。

先生は常に学生の教育を、社会学部のことを、関西学院のことを考えておられる方でした。「病院で治療に当たって下さった若い医師が、ほとんど毎晩のように泊りこんでおられるのを見れば、医学や自然科学に比べると、我々社会科学を専攻する人間は手ぬるい。もっともっと真剣に学生をしごかなくては」と病床から語っておられました。病院をお尋ねする私達に、こんな本が出たが読んでみたか、これは大学教員としては是非目を通さなくてはならないと、ベッドの中で読んでおられる本を見せて下さいました。こうした教育へのひたむきな姿勢は、先生がご自分のゼミナールでの教育をもとにしてお書きになった「小集団教育」のご本のなかに、にじみ出ていると思います。

先生は研究熱心な方でした。ご専門の農村社会学の調査のために、若い人たちと、あちらこちらに出かけ、資料を集め、分析なさるだけでなく、宝塚や箕面をはじめとする多くの都市の市史を編さんされてこられました。こうした幅広いご活躍は、研究者としての先生のお名前を学界に高めたご著書「農業村落社会の論理構造」や編著「農村社会学」といった確固とした学問的な基盤があったからこそできたと言えるでしょう。

先生は情熱の人でした。私学の財政危機を見るや、国庫助成運動の草分けとして、ご自分の利益を忘れて精力的に全国を奔走して下さいました。また関学のスポーツが低迷し始めると、なんとかしてその地盤沈下を防ぎ、かつての栄光を母校にもたすべく1974年から実に10年の長きにわたり体育会長をつとめられました。また総研室長として、お亡くなりになる直前まで極めて創造的な活躍をして下さいました。

先生のお働きは、ただ単に我が国にとどまらず、中国の吉林大学との交流の話が出れば、その先遣代表団団長として吉林におでむかれ、また同大学から代表団が来学されたときには、歓迎委員長として、大活躍して下さいました。現在吉林大学と関西学院大学の間に提携が結ばれた陰には、余田先生のご努力が大きかったことを我々は忘れることはできません。

余田先生は文学部の社会学科時代から社会学部創設に当られた数少ない教授の1人でした。先生はそのまま社会学部の歴史であったと云えるでしょう。創設当時の苦しい時代を多くの先輩方と共に乗り越え、学園紛争の頃は学部の大黒柱として学生に対応され、二期にわたって学部長を勤めて下さいました。先生がお亡くなりになった後、我々は改めて先生が占めておられた位置の大きさを痛感しています。

先生が天に召されたあと、学部のなかに大学のなかにぽっかりと大きな穴が空きました。その穴を埋めることは不可能な気すらいたします。しかし、毎日の教育と研究に努めることにより、少しでもその穴を小さくすることが、後に残された私たちの責任だと痛感しています。